



Title	実と虚 : デザインに於ける隙間
Author(s)	渡邊, 敏雄
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

実 と 虚 — デザインに於ける隙間 —

渡邊敏雄 / 関西芸術短期大学

我国で古くから知られる市松、格子、千鳥格子、縞、矢羽根、亀甲繫ぎなどの図形は、隣接する空間に同じ図形がかくされている。

桂離宮松琴亭の襖の意匠にも市松のデザインが見られるし、京都東福寺方丈の庭園では白砂と緑の植込みで市松のデザインが構成されている。最近横浜に完成した金沢ハイテクセンターでは石と水で6.25m角の市松が表現されている。

イスラムのタイルでは、十字の連続パターンの隙間に星形が見られたり、六角形の連続の隙間に星形があらわれるなど、かくされている図形は隣接する図形と同じではないが、虚と実の二つの図形で構成されている。図形を「実」とすればかくされている図形は「虚」である。

エッシャーの作品にも同じ様に実と虚の関係を見ることが出来る。葛飾北斎も絵手本に「ねじ麻の葉」「六ッ手の万字」など数多くの例をあげている。これに対してバザルリーはその作品ビネールの中で、図形と地が反転した時に元の図形と著しく異って見えることを明らかにしているが、イスラムのタイルと同様虚と実の関係は存在する。

パナマのクナ族の間に行われている「モラ」は色の異なる数枚の布を重ねて、下から上へ順次少しづつ大きく切り開いて上の布のすき間から下の色を見せる手法で紋様を表現する工芸であり、隙間の効果を生かしたデザインとしてユニークなものである。

一枚の紙を任意に切り離して隙間のある新しい図形を構成して実と虚を作ることが出来る。この時隙間も図形となる。

一枚のケント紙にリズムカルに切り目を入れて折ったり、ひねったりすると隙間の効果で流動的な美しさのある立体造形が出来る。

ケント紙を折り曲げて角筒形のユニット立体を作り、これを上下左右につなぎ合わせて発展させると複雑なリズムのある立体造形となる。この時出来る虚と実は重層的なくり返しの美しさを見せる。

和風建築の特徴を最もよくあらわしている格子は、通風、採光に有効でありながら外部からの視線を遮る機能を持っている。格子の組子は実であり、隙間は虚である。その実と虚で構成されるデザインは変化に富み、京格子、奈良格子、倉敷格子など地方による特徴、親格子と子格子の組合せの変化、構成材の太細の組合せ、町屋、武家、社寺など建物の性格の違いによるデザインの変化や或は米屋格子、酒屋格子、糸屋格子など商いの種類による独特のデザインなど先人の工夫が見られるが、虚と実が等差級数、等比級数のリズムでくり返されるデザインが多い。

インドのアンペール城のシャーリーは白い大理石板に花模様の隙間を切り抜いたもので、日本の格子と同様の機能をもっている。イスラム建築のモスク、メドレセにも幾何学的デザインの組子で構成された同様のものが見られる。外部からの視線を遮るには「実」が要求され、通風、採光には「隙間」が必要となる。一方室内側から外部を見るために「隙間」が重要となる。内部と外部では「実」と「虚」は反転する。

格子を立体的に構成すると立体格子となる。コンクリートの立体格子をスケルトンとし

てその隙間に居住空間を嵌込んで、可変居住空間としたものが一昨年完成した大阪ガスの「NEXT21」プロジェクトのデザインコンセプトである。箱根の組木細工も立体格子である。

すき間と実体で構成された立体の面白さがある。こゝでもすき間は造形上のポイントになっている。

インテリアに於て天井、壁、床に存在する隙間は空調、吸音、採光などの機能上の必要から生じたものであるが、造形上の考慮を加えれば有効なデザイン効果をあげることが可能である。

劇場の壁につけられた隙間はコペンハーゲンリブとして音の吸収に効果がある。リブの形状とすき間との構成を変えれば格子と同様のリズムカルなデザイン効果を得られよう。

パリのアラブ世界研究所の窓にはカメラのシャッター機構を用いて光をコントロールしている。ダイヤフラムの隙間の多少によって入射する光を制御するシステムは他に例を見ない。

床の排水溝の蓋に使用されている金属の簀の子はグレーチングと呼ばれているが、これを壁面装飾に用いるとグレーチングの金属色と、そのすき間から見える壁の色との対比によって意外に美しい効果を見せる。上に透明ガラスをのせればテーブルトップとして新鮮なデザイン効果が得られる。グレーチングは隙間の形態によって様々のデザインの展開が可能となる。

ミノル・ヤマザキ氏設計の建築のエレベーターの天井はステンレスと真鍮を編んだネットで構成されているが、メタルの隙間から洩れる蛍光灯の光が美しい諧調を作り出している。

ロンドンのピクトリア・アンド・アルバー

トミュージアムに展示されている倉俣史朗氏の椅子はステンレスのエキスパンデッドメタルで構成され、メタルの隙間の作る透明感によって軽快な造形が作り出されている。

梱包に革命をもたらした発泡スチロールはその内部に梱包しようとする物品に応じた隙間を形成し、こゝに物品をつみ込んで衝撃から保護し梱包の新しいシステムを作り上げた。物品に応じてどの様な隙間をデザインするかが発泡スチロール梱包の目的であり、まさに隙間のデザインと云へよう。

発泡スチロールは切断や接着が容易であるから立体造形の素材としてすぐれている。

これを原型として鋳物を作る技術がある。発泡スチロールで作った原型をそのまま鋳物砂に埋め、熔融金属を注入すると発泡スチロールはガスとなって消滅し、残った隙間に金属が流れ込んで鋳物が完成する。複雑な形も割型を作らずに鋳造出来る。軟質発泡ウレタンを用いると軟かい形が得られる。新しい技法が新しい造形を生み出したと云えよう。

野口監鳳斎作の竹製花器はスリットを入れた竹を素材として、スリットの配置、組合せに工夫をこらしたデザインで、すき間の効果が余すところなく表現されたデザインである。

以上スライドで見て来た様に我々の生活環境には隙間をもった多くのデザインが存在する。「モラ」やエッシャーの作品では隙間はパターンの成立に深くかゝっており、図形と隙間は表裏一体である。又インテリアに見る隙間は機能的な役割を担いながら、建材と隙間の作るリズムはインテリアデザインに変化をもたらす。

実体と隙間（実と虚）のバランスが美しいデザインの基礎であり、エッシャーの様に虚の中に実を見る複眼的思考が新しいデザインの発想につながるのではないか。